伊勢参詣道中記

下

特36
66

大王ハ玉の冠を袞龍の錦乃御衣七宝の玉
坐るく此身の人一丈八尺ハさかぐ〳〵熟事
の如く車輪のごとくなる此眼を開うせもひなく
[illegible]お蜂とハ你ぢ〳〵か倶生神我
[illegible]を龍簿をくゝせ一生作業の善悪を点指
[illegible]ふ所くふぐさや向ふ彩法師のおく〳〵ふ
ちて油さりあつて為りたるる小法師の忽
然ちてあゝ此おちち観世大士化現大
王ふ対し此女子ぐ支ハ男儀の宮内ありて

混ふ十句經を於て其功德を讃ずる経
文事の多きもまぐ〳〵ぞ何事か閻浮に五つを論て
一切衆智の所生と十句經の功德を知り而
地獄の苦患のみを論ぜん三塗の悪
所あるべき様をしめす所生として法界に
を精陰せんと思ふ所に作者うば
大王掌と合を大士意底の金言何ぞ遠背
しまるべきとかくあるべしこの心ふ仏を
守へられて大士あ矣もひお婦を五つを

立出まで冥官は此を見て低頭
合掌をれ〳〵八本又殊勝なりお婦ハ
まづ〳〵うふ大士の後へふ法ひ四方とるふ後
ひば右も左も皆悪く八大地獄呼嗚焦熱大
焦熱黒繩紅蓮の大悪所皆目前ふ出ぬ
焦熱三弓の大猛火雨降るふ焼上まで
銀漢もまく焦れ高んと火炎ハ車軸の雨
のごとく毒風狂模熱砂を吹うを四面皆ふ
く猛火ぞれ遁まるべき方もなし四方

八面四方に罪人どもは苦をうけぶ却乃至
なりこと中小上も如きを位を官いやどなき
人々の後羅の袴袋金の裳を冠り金乃
履ちも云るた人々の炎城下鄙の業に歩
きを猛火所小法苦を也ふいんも中々
癒しき又一所を又人々ぐ方をもなき大鉄谷
ひりこと中ものを唇おして真の毒瞋恚是を繩
地獄とやいへる大鉄而なること其中に苦しこと
居こるハ右家河門法丘比丘尼の形ひ形ひび

優婆塞優婆夷の後なり中小て一際悔きハ
ものをも云ぬ云も者を信ともを人々を也ふ
ぶ為を繩りて云ふ小ふまて傳かめし是昏谷の
内小側小つ云々れて法苦しまを也ふと獄卒共
乃立加川て口々ふ呵責して云々仏ふ邪
人小ふ川て初る形小退入て形動の苦患と
云ハ自業自得果是非なきこと也し所も
なき立家に世智の者どもに筋なき邪法と設教へ
て乱るき拙どもとかこる悪所小引墮すこと

是仏智なるがゆゑにあるべからずやと問ふ一の義の起りも
中に忍きお悩ハ人於て遇ふ所なるべず見いうある
罪障おて到る苦患い変まゝやんと問ひ下せば彼
小法師の至誠の出ふ仏ハ如何やる
偶く変ゞ人身を受ゞ仏法を遇刹さ
刹数深劫の身と到ると命生多生の苦因縁
の我すあるものを流転生死代の悲さい三百
年来西法ハ土を拂て滅滅して邪法ハ湖の源
ゞゞ清を以て清ふつぎ来て邪師ハ蜂の毒

ゞゞ蜂の起るふ仏ゞり有常の法ゞ義途
ゞて仏を求ハ法を求む
ゞゞ仏ゞ難強て
ふ生十二時中念念心ゞ
念念なれで直ふ是其身こ仏の仏ぞし
この如ふ除源ハいぞ支是ゞ人造作
ゞ看経看教ハ皆造地
獄の業一代経ハ古紙
ゞ唯義弟紙求の心を歇得ゞ求心歇所
即是仏と仏ゞ示ゞを文ふ解ても有ゞ唯

居る往き紀てハなき拔ることよ去る往不古欲も
嗔りの人をゑるゝう佛ゑれ仏もと、嗔ゑの人
世の中ハ金ゑてゝこして稱ておきて抱ゑ後ハ死る斗ぞ
ゑゝいや惡もいやくいやもいや唯宗と者て稱う紀ゝう
ゆゝ祭や客ゑ戒家と住ゆて須弥を枕よひゝう寐の去
ゝれゝの孫小能ゝ系兎をよ是いゝれ六つ向上の
一大事義お捨へて一切ゑ惡のゑ小おのてゑ出
しまゝゝ形れ坐禪祝法是ゑ出れ礼拜恭敬
是ゑ出まゝ解紙ゝれゑ出し第禪夫是ゑ

出嗔月ゝ元ゝゝて月ゝと送を是故小去ゑのみも
山猫の白毛ハ合ゑを信よ清つゝゑハ剥ゑてゆゝ
人のゝよとゝて行ゑせんさゝれゝ猫谷川の水
ゝんざる安ざるゝ猫のゝつりもかまハざるゝて流る猫也
是彼古德の潤る耳安て聾のごゝく口説て啞の
ゝゝ如ご彼嬰兒行の大男なりと稱ゝ形ゝを
數ゆ月年を法ゝう佛自ゝて唐の大和と川
合ゝて宣教小胡説乱道す義小おのてかの
道蓮小拙く家業小嫌く妻子と妻ゝゑゆず

頭を刎て寺に入り口と鼎底の破瞎禿大の家運と開ひて跡を掉つゝ踊躍し尾を動かして歓喜者に云ふ言ふ所の事仏の幸ひぞやと今の世の人初て大徹大悟大安楽大解脱乗を聞て腑とる事我が迷心の外佛の求ぬさるなく乃の所すべきなしと云つゝ飽まで食ひ腹ふくれて法水日々堆くして列を睡て心に大快楽湛然と古より悪婬の業坑と名づけ死瞎漆坑といふ悟未熟ふ睡眠し思ふの活計とハ此人の業とて悲むべし此おのれ向上の事に土砂排て戚々し祖庭孤危の玄関頑根に透て頑落す是なく世間の習慣の悪知識の邪説の教の信者し死を死して彩もまゝ動すとして恰も黒繩を以て通身縛殺せるごとくなり心上ハ一生一枚の黒暗坑冥なる死後ハ本黒繩地獄の中に陥して黒き繩を以て大黒暗の中に投るゝ事を二祇百劫の苦患を受ること行ず故ぞ彼一生の受用悟まゝ遠

もつぱらどもをもつて悪とも云ふべし胸中八苦より八識
を用乃合議を把住して口より乃ふ会を会ふ
とふ外面八是彼却閻小果邪法不似ようを
ひとも内證八授舌泥梨の口業多く形八智閻
口ハ常不新色の大悪法を設ひて限りとなる
主家の男女を教壇して新く形人外乃至智新
見の親族とを殺五逆の手気不同し色故
不二二百年来被舌泥梨と黒縄獄中別て
死人ありて叫喚苦悩焦熱河鼻乃獄中

より来ること不絶まり邪見を起す
るに依て黒縄泥梨の悪所に堕不多人完
不悲しむ母く宮不憐む一係閻家不神ぜ
此等の親を縛り情状を拷問して係り釈着
及び他人の中ふも人行人者ども人法ぶさふ
此等の親族と者し法ぶ世ば八大地獄の
形くの苦患の為乃を出ようしめ
為中ふも伝も宮も稽留も公家も武家も
罪障ある人ハ農工商の百民を擇まず

奴婢僕從を合かゝひ法ともに知らず悪行不
道に入られ、善を勧め教の大苦患を告ぐる時
分は唯て人を誘引し生あるものを殺
し失法ともにたゞ勤めて色の利を勧求
せ、やはお孫てゝ色れて四十匁程を急度
まゝなられと汝は度量〻閻浮へ立帰る
此法の威法なるすや人人是をなるべきて
かゝる失ふことなへ立ち公事つきて母
の懐中ふ抱きて伏し居るを見る母人よ

お孫てゝ京青茶強く拘りひそ法門を
見たれで浪りもなき事ふ付まて三年ふ多
ふも功法深く利益為出たんず法を見信
しひて、永き生を助るひふ当一てゝ
付るでゝて寺迄一孫迄よ拘り
ものけるよ我を信彼を我村言孫ふ於て
法施せ自ら毋二三度来て高法を拘沢し
お孫も死上り相続彼一度心ハやけふ此世
高後寺ふ参ぐかるひ親く心ぶ故なし

止りぬと中して たべと呼くゝやしひさと甚母寄り
相伴りしるハ実ホ寶暦丙子の春より死
空よきぶべし 敬しつゝ 法ホ一廻死 年まゝ添
若此 寿ひ 閑居ホ立 ゆゆゝ 具さホ 冥 遠乃
苦患の忘るゝかりしるを 相伴りたりるも皆
芸此経の利益なるすや 同七年寶暦己卯乃春
法列加茂郡の遠より 尼信 人の来り 来すん
温 幸て一石の云く 名 此 ぎゝ 行べず 法 物
行中上度事の伝り 当 月法 より 於て十句

経ホ不思議の 霊 於 ひさき 師 此事 吉年 法
加神 より 弾 の 於て 大法 於 行り
ゝ伝 るさホ 法列 行 久 弱 細目 の 辺 ゝ
あて 不 法 於の 別 十句 経の 霊験
勝 ゝ 成 伝ホ さ 久 弱 細目乃
を 原 ホ ゝ 不 の ゝ る 者の一男子 年 五六 歳 ゝ
成 伝 の 生 れ 為 ゝ 眼 盲て 月日の 生 り を
ざホ ん ゝ ゝ お 件 伝 父母ハ 一 の ゝ ゝ ま で 此
ゝ と 痛 ゝ 敬 ひて 神 ホ 仏ホ 行 で 移 ゝ 移

無きもなほ絶ふる事なく秋より冬に
おゐて十句經の靈驗顯入る事ども色々
由を吟及びて去る年家内陰ふる夫婦に
合を湯あゝ　水にてゝて大悪病を受て正月十
七夜をこのふる十句經三ヶ所巻をとて作りごとを
年六歳男の年の男子あり眼をたちぬけてたゞ
をもひてよとて肝膽を碎き丹懶を抽んで三通
をもうふ二月十二三夜ふ四巻を不見たゞ
まハ三日ふ巻も不見たゞ三人ハ

いふも信仰なる無ども十人ゝ形をして毎夜
なゞて十七夜の九ヶ時をふ開く三ヶ巻をえん
て各く互ふ抱び外ゝ出る十八の夜又ハ
外面ふ行りて世ゝ勅母ハ甚ふ驚ふて飯の雑
事お管く彼三人ハ中居の塩壺ふ外居ゝ
ゆゆまゝ出ん信仰して經へ入手巻ゝ
驚死法ゝ走りまゝ抱きていまゝ新むつる
やんを存ゝ出ゝ三人ハ歩行なる
ら抱きゝ母ゝ

雌馬を初て見て畏るる母は手負て
あれはゝ〳〵きあはれあはれ前世なる馬なるは
とぐさてもるらふものはきたりまくるきもの
乳我出は常ふるゝはいで描の形をてちと
いるきものなるんとおりひるふ呼まる遠ひなる大
るふものやと知ひくはで又は初ゝ紀年初は大法
ゝは大知ひいるゝもぞ知れば母は呼ゝりきれば
ゝるあ鈴やゝるゝやな十句法の法落や今新は
坊ゝは眼ゝ眼ゝ初ゝるものを見知られ

入て法呼びゝるて待ゝといへば父はよろこび抱き
坊けり坊は男ゝ人なるかゝいへばゝるゝ角の息も
ゝ初ゝ見ひゝ急ゝ一初の人ゝを手奇法とも
ゝ見ひゝ急ゝ一初の人ゝを手奇法とも
悦びあへるを彼あへの尼ゝ同ゝて待村
と過ゝるゝが十句法漢語の功法不思議森代
の霊絵あるゝ人ゝきゝけもば呼ゝ抱ても通
ゝゝ迎ゝるゝ性の鈴樓を見ゝ仏かの前
童ゝあゝ抱ても鈴ゝ人ゝも法ゝ呼せん

と庶系村小路より波家に立ち入り育みハ
えより尼法師のみ教を初めて尼初めりれば畏び
貝を作りて是ハいうかるる人なるぞや母のたく是ハ
女性の出家しまひうるかてあ信心ふかく
世ハ是より何心行方へ無きを思ふ人々なる世
夜尼の曰く是ハ出家より山遠りみて十句経を
勤て法華しまひる後別の沙羅樹下を所
の方を心掛ものなり夫婦ハ世より手を合を
有がさやかなや時を師和尚様の十句経を授

き勤めさせ山ばハ我ハ一生育人なるべ
ずくしもなきは法華をいつの世よりい教ばさく
感涙おさへるよけをバやしやや育ハまを人合せ
あ発やまやなきを和尚様のいまする後にと
やんハいづくなるんかあさあるをんをバ
父ハなるを小屋色のをを扱ざて後にハ性ハ法
方角小弟をりと義母をバ育ハ別ち東南の
方小むうれてを合色縫で私毎しるくと
十句経を十反斗唱へ名ばでをる人涙を流なる

夫婦ハ手をつき頭をさげて法師ハ仏ばかりを中坊くゝ思ひ後坊くゝ到るまゝ師ハ
ふ家人せをもづ坊めぐ招待を悪く言ひせさせ申ひ頂くゝ仏礼やさせ侍びもく五里や十
里のあなバ坊めをとつれ推参し歳末の礼礼もやくゝ仏ハやけ侍ども山川を不
踊て侍る事ハ旅路ふ人ハ思ひなぐらも延引
す是くゝ彼くゝ事ども部を侍ひくゝ後浪す坊
ハいるよりも人合を我くハ礼のすくもこぶ侍ば

此経と契りより上十日経法く遠くそやくゝ礼
有人是ども同音ふ皆朝意を遠々ハいう者
かる者ハ天戒を動り見祈を感ぜむ
ばくゝ人ども人を合を野も山も
あくゝふ常楽泰澤と唱へ近代希有の
大佛ども皆経の威法なり〔五六年前口伊
豆伊村伊東ら娘そそ石ハお家年の法十四五家
男員客ら川人柳もそもも宮ら法も
なりなれば人ぐふ牧の心法ぐらなる

新なるを二人ともに不情ある者にて物を食非
人を情に乗の鬱居の侍を入て八幡入て祈くハせ
なぎ〜に言ふ及べく投宮も宮〜物ぐ去屋らき
もの形なるぶ宝厨子之百の去かの結なる分
お産を風邪ひ出〜百業去るなくこ為して
除不幸切しうを生新きも湯ともなくく
病人とかくこ亜ひて智を治を香を焚る不
寄長の侍一人人形をまて山伏を尺て大な響
きを法を入人をさばり法験をたれバこと

何の詮も不生なり法ふ伏りみ病人をれ周て
胡麻をすみ加ひてよ人命治ばバ平世のみ。命令
ひぐ義務するも方べきぞして袈裟袋う
下義をれ出〜お呼てるくこ胡麻をはぐ免
ぐれぐ実む放バて病人の前後をかこて皆
同音ふよみるをはやせん香二を炬侍ひを
漢つんとおひる時加自伏不ぐやといふ
智〜けをバ人〜弟を誰ぐや人のハお産ぐや
なんうされぐまこ〜ぐやまいかして家の和尚様の

仏なくして結縁なし仏縁とさしたもふ事なハ遠くよひぞく湯漬を食んとすれば人〳〵
脇びさるべきて注出すもけうの事もあり時と
ぎやくもなりけるみ向の居の事ハ彩る
さいぐの事中ハ樓閣もえやうず朝夕をとり上
〳〵優なれバ心有者ハ感じ入るハ実元あり
理なる事切果てる仏世界ぶ再び蘇生する
大乗法の霊なり枯木に花の
咲てん仏蒲の珠再び帰る
来ていたんらふもかふもみ給ふハ時仏世界の
功法ゆ法佛祈の功花もいぶ漬人恋と云
ふ戻ふ戻りて同ふ不漬ゆ打ぐお尿も浄牙
小達者小ゆり契ふり上ふく余ふ形ふふふ不漬び
て経を漬ゆ打バ去ふふも形も山ふ乃人
ふ合也七宝世界万宝世界きふのハ仏経法信
ふ霊験ふふふもかふふも彼人ふ法心の内ふ行ふふ
中〳〵ハ弁ハふり名ふ手ふ後寶暦年之癸酉の春
後別法隆の事ゆる是仏の法の南よあふ仏て

二川やとい所の主者の二男子十八歳の時分風
邪出て二月三月怪しが醫者も弱者も弱し
なく終に空くなりたれば一家悲歎涙を流む
彼りたる如く日比出入の唐兵の信一右人彼切り
武藤を頼るより内へ入れ人々よ彼を主人切り
なぐ行わぐ彼を見ひてもて文く病者のあるを
彼者二世のあるあれば皆切者十四歳とよ
まして一雄の者を捜さ都さ遣和れば案元
と皆々歩者一同喜ぶ元と遣心元よ百姓ふも

及びぬんとと思ひ名時分後やか彼病人むく
とを起ふて知ひ行やでも我は今
番ひ義牛ゆ行ぐ恐や者やか嘆き寄
病を言い祈り冥土へ彼さ名前やを名
行ふもなく大勢ひて十四歳遣ふ彼ふ
れば我も遣ひてを遣彼ふ処へ急ぎれ歩
一人あるを出你且く死せよ半ふの通路乃
彼の変ふ方むふて嘗と人合て信心ふ用ぐ
遣ふまば必ず益生すべきを世教へ有けるが

刑法敢の重り瘡漏しるるを本とし百姓も
瘡つんとそひるる時礒くば秋の頃より東の山の
端水登りまつぐ〳〵四面沙汰水明るく成るが是
ぞ新八郎生まれ来り伝りて人〳〵よ幸ひ出ぬも
形瘡漏したひ出ぬ法の教の耳に入る時心
よりも明るく事力も健なる様に成るぞやと
経瘡なぐ人命年とも年生の如く度く治べ夜明め
出バとも遠と全度しるるまり出るよし
なるべ此法修の霊験なるべ実りまるぞ

八月年宝暦己卯の秋老夫深川より行りる年
武州之田の郡り仮古宮仁の某の妻去寅の
六月中家より出ぬ雅治の年祝より加つて
百姓弱りて年八月の末を永の出ぬ半病の
年に年小弱りて秋疲れて終に九月小雨〳〵
成日寒方に敢毎なる人来りて臍に脊指さり
なぐして移りて十日程敢百返唱え
病人小も変へてよ年世夜よ入て晴れのと成気
平と生れ名成なるて御様て金を交ぐぞ

出る息入る息を止め止まる事なく間断なく唱へ
奉れば病人よりまづ病人の家内の人々まづ来世は
必ず助り給ふべきなり聞て信ずる人は病人
病人は法華経をよみたてまつり奉れば病人の釈の
義中に宝塔品に美香美味の人の身内宮殿に佛菩薩の
座に居給へる人の身内宮殿に佛菩薩の
舞給へる女房の白き衣掛たるを見て知せを
もひ病人に出家し給へ武陵の内侍殿の辺より
法華経を書て供養し給ふ俊の奮間有て微妙の一
の奇特の人を文を編す法華経なり我れ力
とやうに法華経を死を救ひ人を救ひ給へ人全
牧を信ずるまゝに必ず我れ心へ来給はずして
ずるよう高ずず信ずる人を文を漢編せよ
編せば必一生涯火難盗難疫難なく寿命も
まゝ長遠ふして家内のまゝなるべし抜て
高ぶる事なく此法華経漢編を以て の霊験
功徳たゝい海は漢嘆し奉れば熟
と擇ぶべし近き所をえず事ふ一切の人を家へ勧て

此經を讃誦せしめよたち大法施の功徳と成
て其徳たとへバ七宝を以て百千無量の宝塔を造
るに勝れり宝塔ハ時ありて壊滅す法施の功徳ハ
無量劫を歴るともつくる事なし現當二世の利益あり
去て菩薩の威儀をうけひ佛國土の因縁とも成ぞ
かしおのづから此法に感化せられひ秀鸞などの沖る
に等しく月の光井に澄まれるがごとく身を治ひね
花のあれハ氣力たち健かにて身心ともに勇壮なれ
久しく行なはれざるはなかりしがさありかならずさきて精神を

凝らし無庶に讃誦し此我も子孫も後世まで安楽なり
久かまし當此經の盛徳殊ならく感じいへる
らし是に坐ぶあらし折々後熟く世に當寰近乃
ゐ根を考るに因業の善因因業の善果遠
いざる事ありしめれ「天明年丁丑の夏六月廿日
見ハ原村地藏の今日なりとて東西七八里がら
老若男女群りて参詣すること
年々是の中村にハ年の法六斗おほくの老婆
ども六七人同志にて沙羅樹下に詣で来り同志に

彩ひろひ我くハ芝より二三十里あゆさなる
桂山と戸和のきぬぎぬも成ぬ和尚様を尋ね成
子細みて地蔵の舎をかつけるぐ給で来り作り
ぬ悲しらて忘れ難ぐ思ひ入を出て拾ひ
乳次郎入をと口ふくひ入をバ伺ども乳なし
柳見きを心を中ふを安一人法を絶入り傍ぐ
膝を小細くしく指寄る玉なやあかさや黄
三月八幸後の所を詠て自分出家好
ト云れを踏ぬ死を出れ乳ハ行の

風情もこれなくまくに出れ自身ハ乳
四郎ら成て後殺を乳来雖義の方の方居住乳
ねびたるぐく年寄秋一年生のぬく達若ふ成る経
しとやうん家ともやとべし子速ふ推参行乳
寄くとまくを出ふハやけふを中出ぐ
寄ぬ後の義経の迎使ちとうれとうん
家来も形く呼ても寄ても什方桶の雪井の宝
を詠やり伏寄を作家ふをの今るうれ中な
原の地蔵は今自ちうてうて人を系詠せる出ぬ乳

ゆへず移しとりさん一家もなりれども世あての事ふ
一月なりとも伏敵と系世くなるく系りはとひを
ふしきびし法華こるき信も見ひまざる事ものを
弱びわされ果ものを系よ同じ事法の老女一人を出
てはを實ハ法ものを去ずび一向相もものを作ず
代老波めび成ハ二三年来大病門交お形ひこの去
来つくく病乳法牙ふ移つまり織も系もきくく
今を限りとくくれば道とは老ども お集り移ふ
つまり作ずも力及ばず涙ふ事切作り処に内舎名

お法居一人人起滝して毎日ものを絶今唯
と彩亡のものこれ者、無縁の老すてはバ布施ハ
なくも出ず無ふ拙一返出優たびせものひてと
香炉ふ株香ひとものり お涙移出とバ二信の同く
人くよ沢番二世の利をうれバ十日迄ようと作るを
ぞ漬ゑくるくハ彩と拭へて漬ものへ事ぬ人
くも口まり紙して漬ものハ ゑくものへさでき
き出徑あるかくよ移りも涙ばものと人合を結達んで
漬ものへ彩とり上くくようくそものハきるきあぬも

法とも小乗同意小乗ならばなれば人も多と合せ
立意まて入給ふ事と張り小乗行小家もめらぐ
牛車の法經中家の車ありて七者ハ牛とも同と
動ぬ行ふ事人迷し弟とすり付多と人々を出た
成振やの雞や狗し犯婬めと報りんとて出意
悲也へ人ドかう事を孫の和を示やは自身出如
下ふ事出れド さん振もめし人よりは絶事下て
くるやいの料理して出今合もをど度やふ風に
なし行水をしてくをを洗しもへやし家ををみ
あるりる処よ信ある若同てく其出宮い涯そ
やをを浄ぐるなるぞしのへだをてや行もを
まぐあまれの月ぐ人ぬ生別出種の中家より
縁伺の系は和尚振出婬めを助け報んあり
とてをるさに出をを成てを見人ぬろし伏あめ
くを出を愛中のうハ云あると人を合悲し宮わ
ますドけるハ意とりをひそ泄汚いを出ら
く出純を の文成するぞ振ひを大切の附を
なるみ出ハ法を浄ぬ振ひを振を世ハ人を

まことにたぐひなく讃く嘉入しがあらはれ給を一樹入
時給もに称入ゝが〻風月を見し言葉ゞ和尚
極ハいづくゝゝゝ我〻ゝ我〻ゝ度や出給まして給びて
ゝ身強ひして行給ゝ人〻ゝ出給ゝれバ
ゝ和尚ハ御嫁の気をゝ出給ゝ時の外法
收びなゝしをゝやゝゝに法ゝ加ゝ為て言ゝ
ゝたゝいでゝ大ゝ收びゝ御ゝれハよゝしてたゞび
ゝひゝゝゝ手を合せ人ゝ為ゝてのお法ゝも
性ゝゝ付桂山ゝゝ出給ゝ成給ゝ笑く

切て居やる加是をゝゝ手れバなゝ程く
幻の法成べゝを信ハ手老ひ病きて歩行更
ゝ歩ハ〻ず二三丁の石とゝ加為て行ものと
三十里を桂山法やけゝでゝなゝ為よゝと
笑ひゝれバ老女ハ息をゝりよゝ為世の幼ものよ
ゝ息ゝゝ御ゝもゝゝ少し抽も杖をゝ御ゝ遠ひ
なゝれ御と行ゝ幻なゝゝゝゝ為ゝ無なる事とゝ御ゝ
ゝ人ゝ語れ多と合と感ゝ入事代濁世の人乃
世ゝ行ゝ石田民のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぬ〻やとだき熟く顧ふ〻こと此經の威德成
ぜ〻ゐるきえは經は天上界まうあまてらをひる
ゝ人こ藩藩よりゆるだ出こをひるゐ行ふ世六
えれ藩也の法藩き水劫業苦の我くと形ふ
ハ此經ふ誠こ行ゝ藩也龍や優曇華の雖
遭雖遇の大法ふをふこるゝ法行ゝ出こをふ
こふを師法施の德のたまを知きゐ彼ふ光ふ
ハこふ佛法生のたる我弘めるひ見達人ハ如法
蓮華の貧欲と唱ゝこと弘めるふ為ハきとや

な十句經を授けふ行きこう優婆塞ふんこるより
此を人こ自宗此家此藩ふく此法を續ゝ
永き末世を助ゝべゝ現當二世の利益ふ和姉や
同心發やかゝゞ行ふや人ハ是をこで出時と礼拜恭敬
一之為ハを代奉ふ法華經ふ受人感ゞ入る
こふん近法こを信こ加の為ふ去一寺の堂ふ寺水
二十余員と集住せ心久く枯望黙照をゝく宗
要こ法寺ふ一伽伝の集たる無為年の法四年有余新
知客副司の任を兼ね堂ふ住持ふ代て四来を接待

一及び眷属を愛念す。家を宮殿第八戊寅の前夏
重五の間なるに、忽に癩病羅つて、朝夕憂悩
すること、牛に病疫出でて悲泣連綿たるが如く
客舎にうつく臥して、誰か助けもとめんと
て、ものを注ぎ、むしろを敷くに、我れ
縁ありて、空しく貧窮の濃法なるに、
ふたりの婦ありて、ともに法を聞いて七日
を過ぎて、病
舊識同行の心友を招いて出でて同く宴を我れ百

日に未だ大苦悩を夜毎に苦しみ大黒暗の深坑
の中に、縄を以て、ものを縛られて、前後左右
に動く事なし。苦しみ堪へがたし。
強る所に、ものを注ぎ、中に二人あり
怠怒の苦して、同く汝一人、縛つく所に
遊ぶ。月業月に、罪を非ずして、多の人
を壊して、暗獄中に、閉じ籠もる。
罪障十悪五逆の重なる。
漂する事、縄と二の大悪所を

たり今く是閻羅城中五道の冥官都市王
叢山府君等は差推し給ふ所の死
ある法鬼たちが法あるもいかんぞ仏十五六宋より
邪師を法ひ邪書を受邪法を修練して夜を
分て力をつくして修造しまする所の大悪法なり
一人今此悪所を修する人此邪法天下
に満つ大凡禅家と称する者曹洞黄檗臨済流
二三百年来大半此法義なる人不知の大
疑なり中終に一箇半箇も此法を知る者
しも此悪風に倒れて彩もなく形もなる
ぞや中終に星斗を自ら不存ず水なく
なりしも土を排て終に果て今時世の者知識
八見道大悟の者主成て称せられて生家の男
女に言作き人人も亦初より終に精進苦
して系解懈怠する事なれば蔑ふも
一生涯八識頑邪常夜の臭革嚢を抱ひて
寝ることする事なれば暗昏睡智愚の心地を懇切
して自去ず来たる此の面目なり知ん事に

主家信心の男女を対し我も人も主家を信乃
佛なるで称迦とも達とも師とも平等なるもの
遠ひかきるの我で修行なる者の信者の信者
よりぞ世間万事の事を法あて身なるもの
るのなるで看経看教これ身なり優婆塞書写
乞食なり参禅学道乞食なり礼拝恭敬是
身なり説法教化是身なり仏を求て行ずん
ば法を成して行ずん本寂滅なる実相
の今拝なれば空あれば高ふ行ずん高ふ行ずん

大乗ふ同じ意人余とふ人今我くが事為
ぞ大安楽大解脱般若なるの閑乃人安悪
も除ぶ吉を求めを向上最上吉祥実
相の大法をふ法ぞ法ぞ法ぞ法ぞ法ぞ法ぞ
よ何なるも称ふあるで儒ふ仏で神教ふ
す警ふも祝ぞ中ふ姉ふ仮儀ふ斯乞
と立枯禅法ふ法ぞ事一分ふ是非なる事
一切世間の死科もあるを名男女をふて扣械架
演傳を係やて大空の中にふりさげふる仏

若ふも為ふも此れで上善の指を求めば下品生後
發するふ力なり二佛の中ふる頑室無死いつなり
生智ふ行ぶ為ふあるずと為ふる事ハ為ふる事ふ書
事もまぐるず漢ふ行ずふ智ふあるぐ為ふハ為ぐ智ふ
行ぶ頑室無死悟も馬牛犬豕ふ同じ是故十
ん上ハ為ふ暗昏昏冥なるふ未ぐ死せざるに
為ふの大深坑の中ふ待下せて為ふ劫報の
苦患をふ行る帝代の佛法中ふるべき為ふ
あやまちでや汝一生ふ事中ふて邪師の邪法を

信受一今ふ行る為ふ陸すふ陸すふハ
為ふ非ふきふ為ふの人を為ふ誘めく苦ふ黒暗
獄ふ陸せしむふ為ふ能ひ千佛の出世
逢ふも知ふ聞まふ難ふ為ふ為ふ為ふ為ふ
怨ふ肝ふ絡ぐ骨ふ徹して分裂ふ股ふ
為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ
非ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ
為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ
為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ

分は果てやんぬ事なりめ多給ふ伴義一苦
患を助け給ひてまた法てハ四法を四法てハ法き
法を弟てつつ形く性誠もなく愛人をぬば同
伴の信も今ハせん方なく思ふもとる法疲
入ハ月も尚まを面方給なり法ふを形も明を外
戸ぶそと知けい形ハいふふいつつ気をもん法
て世ふなきをもの成をてぬ人ぬ踏を行ふもう
なや去形ぶ連も弟ぶさ命の形ハ生て苦
患をえんよりつつを死んぶも住命をぶ行ふの
葬礼や宝ふ事は世命なり豈おのひふ
きのふまぶ見性大悟の道人なる法人を影
作せ法ふ分の宝形の世ふ法ふりいふ法
猜き通意は分を成て形ぶふ未つく加の
同伴の信は形ふふ表をひて助け法て法苦
む邪説の法ふ新人のぶさハ云ひ形ぶ哀ふ
もきを不役なり同伴の信も今ハみん方ふく
寺中ふ宝の程を承法ぶもぶ郷と法く
ぶを形ぶなき苦信ふを法ぬ不の去

寺ふみて法華経を居る所に僧同伴の僧の
かたり出家の居士を勧め法華経をかたり
教ひとをふ者信ぜずぎ教行者ら十日経
二十数経ぜ出し此経を持ち帰りて二三数かの
文信の墓所ふ行くを僧ハ寺中ふ帰り一二
夜同音ふ二三ふ過漬ふて若ハ必ず終まる
ぶべしと教へて飯しかりぶべき後三ふを
経て彼居士再び来り来謝して云ふ何さや
きしやを問ふ云ふ教へ方ハ寺中ふ帰りの

法華経二三ふ過同音ふ漬ふ一時教ふ信来
ふて彼同伴の僧ふ告ふて曰く法華の功徳の甚
きを見聞ハ我ハ今苦患所の苦を逃れ再び
又人間世ふ生す生せハ本此法華の功徳ふよ
て苦ふ眼を開ひて永く苦患を免れ
人ふ移り此法華を漬誦しまひて法神法仏ま
移りて苦ふ知識ふて実見性の眼
と云ふ者ふ念工夫お漬乃ち悟を精修しま
実不思議の方法ふ移り給ふ必ず者ふ者

ても我こころをさとりを説きさとへ勧めて我人
偏執の立拙禅法無縄自縛の黙照拙坐禅
や獨りつや自ら清らのこころずんとも悪所ホ
ひとずり為す此等法邪法ハ禅僧の風上ゆと
ゝやなこの立ホつも者もひと人ハ是をぞ最ヨ
事を為る弓猶ぞてかこけし矢けをバらホを
偏ヨ此法弥の威法るハ寺中ハ騒嘆し
此肉ハこひ合を皆同音ホ十句注を漢作ヒ
も偏ヨを大師大慈悲法弥の力より拡ハり

なる大義事を弥ハ此法注ヒも京弥も坊
なて法る合浦の景を皆同音ホ海を本
弥ハ即天下泰平世代長久第民を楽の形
禅のあるよ伝のなる大法林法より見ホるてこう
ひし有縁やうハやと三度礼拝恭敬て
立ゆりしハ空ホ又為ヒ拡事なずハへそ度賓
暦已弁の吉山野武陵沢のこと漢法山玉関
精金ホ為りホ法中第生家の編ホの欲為
ヨ依て塔岩頭を評唱して法弥ホ意ヒ多分

時ゝ勤て十句経を讀誦し、其後武陵去る岡田氏の老男行某今年廿五歳宮仕も他不越へ人扶ゝ能く善心深き生れつき性八面釈よておハをしへも又なきものにして病苦ゝ多ゝ而不以家世の孫ゝ やゝ生活多病ゝ
ゝて順ゝ ゝて楽まず所白うゝ世と送りゝ不
叶程に戸中高熱ゝ能しきもをるも若ゝ
はゝ ゝ十句経をよゝ而ゝ不おゝて聖き入ゝる
意ゝ乾ゝ大病人ゝ家ゝ ゝ金ゝ引ゝる者の
引ゝ薬治ゝ子あさ者も不ゝ ゝてゝとゝ世ゝ経を
道を修行を免れ能く八ゝ ゝ世ゝ和ハ ゝひゝ
ゝ入ゝ彩あ ゝバ作ちおけひ中の悪ゝハ ゝ和合ゝ
生霊も死霊も作ち離れ山ゝ兵法の閑居ゝ ゝ不
而ゝ ゝハ又ゝ家を一向用の ゝ人ぬ貢ゝ ゝ夫母夫
修行を起て十句経ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ服
作ちゝ ゝて初ゝ月りゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ外而ゝ ゝて希代の霊験ゝ ゝ ゝ
ゝ経の功力ゝ ゝて我ゝが病気も ゝ ゝ

すべもやうやう少し動きそうふとひとえ一筋寒き光は
る夜の夢中ふ不思議や湯殿山天満宮へ参詣
志ふる神おをくをあぐめる能や天満宮天神
言玉神おりくと出現をあらせ給ひ給ふ八旬年
をれを信書くして祈願ひ奉る出
く義戒く若男子海山沒丹誠とをけまし
を祈ふ忘ひず十旬經を讀誦奉作所願
を切法華経なり神も感応ましまして御が病気
ハとるより速く人を使ふ礼謝のあ

ハ行ふ為ふ十旬經を讀誦ふ行ハ行く
法加被力まして火難盜難病難なく来ふ
繁昌せん十旬經を唱ふる為ふ性出ふ
思ひ出ふ愛ハ笑けるみふるより病家以外ふ
全復すれも偏ふ此師の十旬經を勧める
ひ思法なり此る十月十日を信が修へ
使者を以て礼謝ハ寺中皆く
ふる奉又西ひ礼を以ず家貧迫
法武陵海川菩薩切屋の若者ふ面ありて

深心は十句經を誦して妙法蓮華經の
此かど世人所らふおのづから伴侶すなふ
具つる法を紀せば
如上逐一拔擧する所の限りも知れず十句經の
意は法眼正眼ふ見ものを唯是世間住相有為義
幻化夢の幾法一段ものを心最妙
最玄最貴一なる處の大靈法を蓋し徒に是
と誦せん者は者まを心大雪猛精進力と異なる
處の大丈夫ぶて後てや法は一夜此經を誦

ものをくまぐまを天地ものを必定史定大靈
驗ありて立所ふ所解懸殺し大解脫大乱法大
安樂とはんや行が是や法讀誦とあらば是を秘決
の大旨義なりを信二三十年来を幼男女を擇
くば此大事を以て拔あ重ねに十が八九は大利
益をとるべしいつるものとして力とする法
何十人いふ數を考べば若人此法を此經を誦
誦せんと願せば一日心ふ齋ふ戒沐浴し一定を
須さく香ぐ塗ぬと布施增ふ心生して脊梁骨を

望紀し玉ふ事ハ此十句経を念誦し心上ニハ
徳て高位ハ欲望せず大乗一切の人形骸ハ男
女を幼僧俗を嫌あり我ら此勝福を海丹
田の内ハ男かうべ女よあらず唯一片空蕩々地
ハて茅仮の黒暗深坑のごとし是と八識頼耶
の妄分別識といふ此ハ是今時法方黙思枯坐の
邪黨自己ハ正本来の面目ハ如今元辰下
高の所ニ大悟徹底の宝所ハ底の大悪
所なり此ハ信受し抱住して殺ごと

心と八識暗昏々地生名より常ハ黒暗地獄の
中ハ縛立して死後ハ永く黒縄深坑の中ハ
縛下せらるゝ怨恨ても為べきハ邪時の形表なり
此所ハおのゝ行時も住生せばゝ進んで退ざる
則ハ茅里ハ屠氷変ハ炎ハ焼縛繩書なり
ゆゑ〳〵進ずハ退事なず住ハ言ハまま
つゝ理もまゝ変る屠の大雄ハ不ゝ如て
毫釐も屬せばハ千句経を念誦し
心ハ常ハ丹田茅浦の宝所に向て草〳〵

に參究して退らざる則ハ勿論として五樹を
を推倒するがごとく水輪を擲擿するが如く
八識形那の合義織を形解して業因の
雜毒法を踏翻して何等か生六十恒河沙倶
低那由多の由旬の大小樹の樹出で麤細等
の大小根を移却して方等形の大地を
土たる三千大千界を見るが如く掌中に菴摩
羅果を見るが如く長河をとりて粗破して荊
棘を変じて旃檀林となすなり如ておのれ
見まもりてせばロ人樹ちて常ふ十日種を編
しゆとも未だ心念を更お漬を乎一ちて
草に進んて退らざる時ハいつくんぞ乃
玄關須を遶て百千里の荊棘叢を拔却
明暗殊に高閑なる山所ふ到て以見ると
して癡坐して進まざる間ハ鷹を伝て擬未
素小睦眼すを鬼家乃活計とふ是彼機
信を敷きざれば毒法を落在するものや是
彼二乗小果の源覚ふ陷すれ山を形て

是れ[illegible]弘の極[illegible]不[illegible]ち[illegible]八[illegible]に十
句[illegible]を[illegible]通し心上より八[illegible]そ[illegible]不[illegible]く問典[illegible]典
と探[illegible]く[illegible]を[illegible]大法[illegible]を集め[illegible]く大法
[illegible]を行じ普く一切[illegible]生を利益し佛祖の深
意を諸[illegible]一十方[illegible]の會議と共に仏[illegible]を
成就し同じく無上正等正覺を[illegible]ん[illegible]八
[illegible]の事[illegible]我[illegible]八[illegible]なるん[illegible]を佛法
の因緣[illegible]の威儀とし[illegible]是[illegible]西天乃に
七[illegible]土の二三的[illegible]相承し心傳秘授の一大義

初[illegible]心時より便成正覺の時[illegible]かも[illegible]
[illegible]ざる[illegible]の正隅[illegible]より此[illegible]八[illegible]代
の[illegible]世衰へ人[illegible]て[illegible]風[illegible]不快[illegible]隅正法土
を拂ひ滅[illegible]て[illegible]智[illegible]の破[illegible]奴の[illegible]麻
の[illegible]粟[illegible]似[illegible]一簡[illegible]八滅[illegible]邪須[illegible]
況の[illegible]暗坑[illegible]陷[illegible]て[illegible]進まざ[illegible]
行ずべ妙[illegible]田[illegible]弱を[illegible]け[illegible]一[illegible]人[illegible]
て八[illegible]以[illegible]を[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]佛[illegible]
[illegible]を[illegible]仏事も[illegible]ぬ[illegible]ば[illegible]て[illegible]

せん只手捨よ行事も弱き掌汝が欲求の心と渇
渇を求心沼所れ是も垂さび生仏の仏なる
ぞ〻力をそそして常〻教化して情ぶ〻る時
穿琴して一様の大樹と成八天下に落涼樹
〻作つく蔭と陰未ふ猛火炬と暗區ふ
推げ上ぶ所の人家の英伶の男子を執て
宣教ふ咒咀し蓋壇して手足もまゝ動さ
め〻ば指も立ぬふ傳殺せるるがぶ〻
宣なるう故死後まかうず黒縄地獄の中

ふ陰して是腐屎坑の中ふ傳下きゝ事
者殺の悪報法大ふ人を害す人をけぶんで
四法行ふ依てう事代まよ仏人仏法より根ふ
透て感ふ通て滅ふ根を彩を枯す所
の悪報法此等法殺八暗縄黒暑毒毒所
と以く深り堅めゝる一枝の泥塗ふ毒成
事堅ぶ四ゝる牛ふ同一家下行の奴
婢僕従まハるふ劣法出り奴婢ハ生ゝを
去り地獄ゝ入ゝ神を捨て仏を礼す

誠等衆生もまたかくのごとし地獄をすてゝ極楽を願ひ求むべし却て捨ひるべきの法
ゆゑに曰く立て作麼生か捨ひるべきの法
観世音南無佛与佛有因与佛有縁
佛法僧縁常楽我浄朝夕親世音暮
念観世音念念従心起念念不離心

延命十句観音経紀終

明治廿八年十二月■十八日印刷
仝　仝　年仝　月廿五日發行

飜刻兼發行者　足利恵倫　東京牛込區市ヶ谷河田町一番地

印刷者　梶寶順　東京浅草區吉野町十三番地

發行所　經世書院　仝上